【147】

氏　名(本　籍)	雨宮瑞生(あめみやみずお)(鹿児島県)
学位の種類	博　士(文　学)
学位記番号	博　乙　第　901　号
学位授与年月日	平成5年7月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	日本列島における初期定住民の考古学的研究 —縄文時代初頭の南九州を中心にして—

主　査	筑波大学教授		西野　元
副　査	筑波大学教授		岩崎卓也
副　査	筑波大学助教授	理学博士	西田正規
副　査	筑波大学助教授	理学博士	佐藤　俊
副　査	筑波大学助教授	Ph. D.	池田　裕
副　査	筑波大学助教授	理学博士	池田　宏

論　文　の　要　旨

本論文は，日本列島における定住生活に関し，考古資料による定住性の判定方法を確立して九州南部という具体的な場においてその方法の有効性を検証するとともに，定住生活の出現期を確定し，その過程の理解を深化することを意図した研究であり，4章22節から成る本文と表，図及び資料・文献目録で構成されている。

第1章「定住生活出現に関する研究の現状と課題」では，縄文文化が旧世界の他の地域における初期定住文化と並んで早くから定住生活を確立した文化であり，また，定住生活が後氷期の人類史の理解に極めて重要な要素であるという認識の深まりを指摘して研究の方向性を定めている。

従来，縄文時代の定住生活については，生物遺存体による食料獲得の季節推定結果などに基づいて，縄文時代前期には確立していたとされてきた。

しかし，それ以前の時期については，竪穴住居跡の存在，多量の土器や石皿の出土，土偶の出現などの現象をとらえて定住生活の存在が予想されることはあったが，研究者により指標の扱い方がさまざまであり，また最初期の定住生活を考古学的に把握する方法論についてもほとんど研究されてこなかった現状を指摘し，定住性判定の指標設定に基づく本研究の意義と重要性を位置づけている。

第2章「南九州縄文時代草創期資料の編年」は，本研究が主な対象地域とした南九州において，定住生活の出現期と予想される縄文時代草創期から早期にかけての土器型式編年を行い，遺跡や遺物の時期区分を確立して研究の基礎条件を整えることにあてている。

この地域における早期前半に位置づけられている貝殻文式円筒形土器の編年には，吉田式を挟んで，石坂式と前平式の前後関係には二説があったが，本研究において共伴する石鏃の変遷を追求した結果，前平式が古く，石坂式が新しいことを確認した。

また，草創期の編年について，爪形文土器との関係で論じられてきた従来の編年観が適用できないことを指摘し，この時期の特徴的文様として「太めの隆帯文」に着目して，この文様の有無，細石器との共伴関係，出土土器量，石鏃の形態変化の関係を詳細に検討することにより，11,000年前の薩摩火山灰降下以前に属する草創期の土器群を2期に区分することに成功し，草創期から早期にわたる従来の土器編年を訂正している。

第3章「南九州縄文時代初頭における定住性の判定」においては，定住性を判定するための方法論を提示する。方法論の構築に当たっては，最終期の遊動生活者と最初期の定住生活者とが残した遺跡の差異がさほど顕著でないと予想されること，南九州のこの時期には季節性を示す自然遺物が出土した遺跡が無いことなど克服すべき困難な課題があった。これらの課題に対し本研究では，遺跡から出土することが多い土器や各種の石器，竪穴住居跡等利用可能な資料のすべてについて，遺物の数量的比率，柱穴の太さなど多数の指標を求め，各指標を時期ごとに比較することで克服を試みた。

定住性の判定のために検討された指標は，土器片数／石鏃点数，（磨石＋敲石）点数／石鏃点数，石皿点数／石鏃点数，石斧点数／（石鏃＋磨石＋敲石），装飾・呪術品点数／生産加工具点数の比率，柱穴の太さや磨製石斧の大きさの時代的変化及び土器装飾の程度である。

これらの諸指標を草創期古段階から晩期前半までを7期に区分した各期について求め，すでに年間定住生活が明らかにされている前期以降と，早期前半，草創期新段階及び草創期古段階の様相とを比較し，いずれの指標についても，草創期の古段階はその後の時期よりも定住性が低いと判断し得る数値を得た。また，草創期新段階の指標の多くは早期以降の指標に近いという結果と併せて，草創期古段階から新段階を経て早期に至るまでの時期に定住生活が出現する重要な過程があると結論付けた。

さらに，以上の結果を確認するため，草創期新段階と早期前半とに属する2遺跡について，住居跡，加工施設，集落立地，周辺植生等をさらに比較検討している。

草創期新段階の掃除山遺跡においては，2基の竪穴住居跡とともに以後の時期に多くなる燻製施設と推定される連結土坑も検出され，定住的な様相を示している。しかし，この遺跡は，比高5mほどの傾斜の強い斜面に立地しているほか，遺物，遺構の分布が冬季の強い季節風を避けられる南斜面に限って見られるなど，その後の時期の定住集落とは異なる立地を示している。また，定住性判定の指標もそれほど高くないことから，この遺跡は秋から冬にかけての越冬地であったと推定している。

一方，早期前半の加栗山遺跡では，17基の竪穴住居跡と33基の連結土坑が緩やかな斜面に広く分散して検出され，より新しい時期の縄文時代集落と共通する立地を示していた。さらにこの遺跡で採集された木炭にはクリが含まれていたことや，プラント・オパール分析により，チガヤ，ススキが多量に検出されていることについて，すでにこの遺跡では定住性の高い集落が形成され，そのため周辺にこれらの植物が成育する二次植生が形成されたものと判断している。

第4章「考察」では，本論文の論点を，南九州においては縄文時代草創期の古段階においては定住

的性格が乏しく，次の新段階において季節的な定住を示す越冬地が形成され，早期前半に定住集落が出現するという最終的な結論にまで整理した。

その歴史的な意味として，

(1) 定住生活の出現は，後氷期の温暖化による温帯森林の拡大期と時間的に一致した現象であり，縄文文化の成立は温帯森林環境への文化的適応，とくに，温帯森林が生産する堅果類の貯蔵が定住化の重要な要因となった。

(2) 日本列島における定住生活は，南九州において最も早く出現し，やや遅れて関東地方に出現する。両者の間には土器型式に大きな相違があって文化的交流を予想することは困難であり，それぞれの地域において独立的に出現した。

ことの２点を示す，世界の中緯度地帯に見られる定住社会の比較研究が今後の重要な研究課題であることを提示して結びとしている。

審　査　の　要　旨

縄文時代に定住的な社会が出現していたことは従来から指摘されてきたが，本論文は定住生活開始時期を考古学的方法で実証的に確定することを試みた初めての研究である。

また，定住の人類史上の意義という大きな課題に対する考古学からの意欲的な研究として高く評価できる。

まず第一は，定住生活の初現を考古学的に検証する上で，遺跡，遺物の僅少性，最終遊動生活との微妙な差異の検出という困難な課題を克服するため，多様な考古学的資料を定住の判定に利用する方法を確立したこと。第二は，縄文時代早期前半に南九州に定住生活が出現したことを明らかにし，最古の定住化が関東地方で開始されたとする従来の見解を改めたこと。第三に両地域の定住化は独立して成立した可能性を指摘し，定住化が温帯森林の拡大と同時期であることを確認したことである。

しかし，検討すべき問題点もいくつか見受けられる。その第一は定住性の指標の扱いである。指標として不安定な部分のあること，土器装飾のような心性を表す部分の意味については分析がやや不十分なところがある。第二は，空間的比較である。遺跡の立地や分布について，判定住段階および遊動段階の遺跡との対比検証が望まれるところである。

以上のような問題点はあるものの，本論文は独創的な方法に基づき定住生活出現期を解明したものであり，今後の定住化の研究に極めて重要な基礎を築いたものとして高く評価できる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。